

東大駒場友の会



会報第41号

二〇二三年度 教養学部長との懇談会について

四月十五日(土)、東京大学教養学部と東大駒場友の会の共催で「新入生保護者と教養学部長の講演会」が開催されました。これは、友の会で最も重要ともいえる年中行事です。多くの会員に駒場キャンパスの素晴らしい風景—その歴史と現状、多様な人材と美しい風景—を知っていただくことを目的としています。今年度はハイブリッド方式での開催となりました。昼食を取りながらの懇談会は実施できなかったものの、対面方式の参加者は講演会に加え、キャンパスツアーを楽しむことができました。二〇二〇、二〇二一、二〇二二の三年間、キャンパスでの開催を見送ったため、今回はその間に入学した保護者の方々にも枠を拡大しました。それもある、対面方式には実に四五〇名もの申し込みがありました。会場の二二三教室を訪れた新入生保護者と在校生保護者の皆さまは、学部長講演会の後、三〇名を超える随行教員とキャンパスを散策されました。

最初に、木畑洋一・東大駒場友の会会長より、新入生と新入会員の「ご家族の皆さまへ

の祝辞と友の会の歴史についてのご案内があり、また日本の数理研究を牽引し駒場キャンパスの数学教育を支えている数理科学研究科について、斎藤毅・同研究科長よりご挨拶いただきました。続いて、四月より総合文化研究科長・教養学部長に就任された真船文隆先生が、入学式での祝辞よりもリラックスした雰囲気の中で、講演をされました。教養学部の歴史と東大全体における位置付け、前期課程と後期課程、大学院からなる三層構造、授業の数とバラエティについて分かりやすく説明され、さらにはリベラルアーツ教育の意義と化学と物理学を架橋する「ご本人の研究にも言及されました。理系と文系の学生が交流することの意義を強調された点が、とくに印象に残りました。

その後、十五分という時間の制約の中ではありましたが、保護者の方々を知っていただきたいことについて案内がありました。まず駒場キャンパスの研究と教育を支える事務部の紹介があり、永井久美子先生による進学情報センターの紹介、細野正人先生による学生相談所の紹介、矢野ゆき相談員と金城里奈相談員によるハラスメント相談所の紹介、清水晶子先生によるDSE教育(およびStudy of the DSE)の紹介、そして友の会とかかわりの深い高校生と大学生のための金曜特別講座についての新井宗仁先生による紹介、と続きました。定刻通りに懇親講演会が閉会したのち、教員一名あたり十名前後の保護者とグループを作って、キャンパスをご案内しました。案内役の先生の説明や自己紹介を聞きながら、戦前から残る校舎や講堂とモダンな建造物との対照、雨に打たれるがゆえに瑞々しい銀杏並

東大駒場友の会 東京大学教養学部 共催 新入生保護者と教養学部長との懇談会

- 【第一部】
10:30 挨拶(木畑洋一 東大駒場友の会会長、斎藤毅 数理科学研究科長)
10:40 学部長講演会(真船文隆 教養学部長)
11:15 関係部署よりご挨拶のご案内
- 【第二部】
11:40 キャンパスツアー
— 現地:教員による案内
— オンライン(解説):折茂克哉 駒場博物館助教
12:30 閉会



真船 文隆 教養学部長

社員総会・理事会と 活動報告会について

今回で四回目となったオンライン形式での「社員総会・理事会」を六月十日(土)に開催し、昨年度の事業・会計の報告と今年度の活動計画と予算について役員による審議が行われました。

会員の皆様に向けての「活動報告会」の開催スタイルも検討を重ねた結果オンライン配信とし、遠方にお住まいの会員の皆様にも多数ご視聴いただくことができました。コロナ禍以前は、活動報告会後に立食パーティー形式の「懇親会」を行い、会員の皆様と当会役員や運営に携わる現任教員とが語り合う機会を設けておりました。来年こそは駒場キャンパスにお越しいただき、親しく集えることを願い、企画と運営に努めます。

今年度も教養学部との連携を一層強化し、駒場の教育研究活動への関心を高める活動を推進してまいります。引き続きご支援とご協力をよろしくお願いいたします。

「活動報告会」の配信に先がけて行われた社員総会での審議を受け、理事会で協議・承認された二〇二二年度事業・会計報告と二〇二三年度事業計画・予算についてここに報告します。(当会WEBサイトに詳細を掲載しております)

二〇二二年度事業報告

懇談会・講演会の開催(オンライン形式、またはハイブリッド形式)、その他の事業

一 新入生保護者と教養学部長との懇談会(四月九日)

- 二 秋の講演会（十月二日）
- 三 味覚のアトリエ@駒場（二月二日）
- 四 金曜特別講座（受講案内）
- 五 学事カレンダー製作
- 六 音楽演奏会開催への協力
- II 寄付事業

「学生のための寄付」事業を実施し、会員有志や新入生保護者有志（のべ五一九名）の皆様から総額三、六二九、〇〇〇円の寄付金をお寄せいただいた。主な寄付先と使途は以下の通り。駒場図書館学生用図書（九九九、九〇七円）、駒場祭協賛（四〇万円）、五月祭協賛（二三万円）、学生団体への支援（四団体へ合計八六三、六五二円）、駒場博物館（特別展広報活動への支援、六五五、六五五円）、金曜特別講座への支援（三九、七二〇円）。なお、寄付事業経費四七、二〇一円と合わせ、寄付支出の合計は五、七二九、八九九円。

- III 広報活動
- 一 会報第三九号（二〇二二年九月三〇日）、
第四〇号（二〇二三年三月十五日）

二 WEBサイト
<https://tomonokai.c.u-tokyo.ac.jp/>

- IV 会員数
- 二〇二三年三月三十一日（期末） 終身会員
一七四名、通常会員三七八名、会友会員二、
三三〇名（合計一、八六二名）。一高同窓会会
員二三名、東高同窓会会員五四名。
- V 理事会・社員総会や会議の開催
- 一 理事会・総会の開催（六月十八日）
- 二 事務局運営会議の定期開催（六月十四
日、十月三日、一月三日、四月二〇日）

※すべてオンライン形式で開催

二〇二三年度事業計画

新入生保護者と教養学部長との懇談会
（四月十五日に現地開催とオンライン配
信のハイブリッド形式にて実施済）

「学生のための寄付」事業を実施し、会員有志や新入生保護者有志（のべ五一九名）の

三 「味覚のアトリエ@駒場」(ルヴェソン
ヴェール共催)

情報発信の拡充と各種手続きの利便性向上を目的として七月に新サイト公開。
継続的に機能拡充予定

※ログインのために新パスワードを設定いただく必要があります。別途送信の会員登録メールをご確認いただき、設定の程、お願い致します。

員会、ピアノ委員会主催の演奏会に協賛する)

「学生のための寄付」として寄せられる寄付金を活用し、教養学部および駒場祭をはじめとした学生の自主活動への寄付、教員からの提案への支援を継続し、駒場キャンパス、三鷹国際学生宿舍等の教育研究の環境の向上と多様化に協力する。

一 會報第四一號、第四二號

<https://tomonokai.c.u-tokyo.ac.jp/>

曖昧な駒場の私

この間、「敬語」という単語のローマ字表記について、日本語教育者とちよつとした諍いがあつた。その教育者が担当する授業では「*ego*」を学ぶ、とその授業の英語案内に書かれていた。それは「*ego*」と書くべきではないかと私が言つたら、「いえいえ、こちらの日本語コースでは「*ego*」と書く」と返された。それは腑に落ちなかつた。やはり「*ego*」が正しいと私は思った。

私が *seio* にこだわる理由は、四〇年前に最初に使った日本語教科書に「敬語」が *seio*、「生徒」が *seio*、「丁寧」が *teinei* と書かれていたからであり、私にとつて馴染みのある表記が *ei* であるからだけではない。例えば、「明治」が付く会社名は *Meiji* ではなく *Mei* と書くし、大リーグで活躍している大谷翔平も *Shohnei* ではなく *Shohai* とロースターに名前が載る。

そこで、私は反論することにした。反論の根拠として、教養学部の英語部会が二〇〇九年に公表した「日本語のローマ字表記の推奨形式」というマニュアルを持ち出した。このマニュアルによれば、ヘボン式では「敬語」を Keigo と表記するので、やっぱりそうすべきだと私は主張した。

実は、このマニュアルは元々、私の提案で作られたものである。当時担当していた一年生向けの英語ライティング授業で、学生たち

が書いた日本の人名や地名のスペルはバラバラであった。例えば、同じペーパーの中で、「竜安寺」が Ryouanji とも Ryōanji とも、Ryoandi や Ryoh-an-ji と表記されていた。マニュアルではヘボン式を推奨しているが、一部の学術分野では訓令式も使われることから、それも認めることにした。しかし、ヘボン式でも訓令式でも「敬語」を *keigo* とは書かないので、その日本語授業の案内ではやっぱり *keigo* と書くべきだと、私はその日本語の先生に再主張した。

論があった。そのコースでは、日本語の実際の発音に近い表記を使う方針であるという。確かに、「敬語」の標準語発音は「けえこ」である。外国人に~~keiko~~と表記すると、「け・え・こ」ではなく、「け・い・こ」と発音される可能性があるため、発音に近い~~keigo~~を使うことにしたのだ、との説明があった。

針は、まず日本語の口語を習得させ、その後文字体系を教える、というものだった。学術的な文章では not と言語が、このコースでは話し言葉が重要であるとされていた。私自身は四〇年前に日本語を学び始めた際、まず読み書きを学びたかったが、話せることを優先したい学習者も多い。そして、第二言語習得論に基づき口語を重視すべきだという立場もある。それを踏まえ、私はもう反論しなくなった。むしろ、その明確な教育方針は尊敬に値すると感じた。

私は十七年間、駒場の英語部会に所属していた。貴重な同僚たちと共に教材を作ったり、プログラムを運営したりする中で、非常に充

実した時間を過ごした。しかし、最後まで駒場の英語教育の基本方針には明確でない部分があると感じていた。「敬語」を「おのの」と書く日本語コースと同様に話し言葉を重視して授業を英語のみで行う教員もいれば、アカデミック英文の解説と和訳を重視すべきだと確信する教員もいた。受験勉強を終えていよいよ英語を話せるようになりたい学生が相当数いたが、より深く、より正しく文法や語彙を究めたい学生もいた。東京大学で何のために英語を勉強するかについての明確なコンセンサスがあったとは言い難い。

駒場の教養教育についても、その目的が曖昧である、最近では思うようになった。「人文学と自然科学両方の基礎を学ぶ」「幅広く知識を自由に探求する」「批判的思考力を身につける」「いろいろな試してから自分に合う専門を選ぶ」など、様々な考え方があがるが、どれもこれも重要であるか、どれを排除してもよいか、大学側でも学生側でも共通理解がないようだ。

でも私は今、駒場の教育の目的が曖昧であることは駒場の教育の強みでもあると考えるようになった。学生たちが後に出ていく社会も人類を待つ未来も臆げな限りである。確定された知識体系のみでその未知の未知には対応できそうもない。大学で二年間、いろいろな勉強しながらその勉強の内容と方法と重要性を懷疑することはとても貴重な経験になるはずだ、と私は思う。確かではないが、(名誉教授・グローバル教育センター特任教授)

グローバルゼーションオフィスと駒場キャンパスの国際化

大澤麻里子

グローバルゼーションオフィスは国際交流センターの一部門として設立され、今年で十年の節目を迎えます。駒場キャンパスの留学生(特に英語対応を必要とする留学生)の支援、留学や国際交流に関心のある在校生へのサポート、学生間の国際交流を促すことが活動の柱となっております。設立当時は、PEAK(教養学部英語コース)がスタートしたばかりで、教養学部のA・K・O・M(短期交換留学プログラム)での受け入れ・送り出し学生も三〇名弱と小規模なものでしたが、この十年で東大の国際化を巡る状況は大きく変化しました。全学レベルと部局レベルの双方で、様々な形態の留学・国際交流プログラムが整備され、駒場キャンパスで学ぶ留学生の数も、駒場から留学する学生の数もプログラムの多様化に伴って急増しています。

二〇二〇年に入り、コロナの影響で人の往来が物理的に停止したことは、キャンパスの国際化にとっては大きな痛手となりましたが、この間、海外との繋がりが途絶えたわけではなく、ビデオ会議システムを使って、協定校の学生との交流会や言語交換プログラムを実施したり、海外在住のゲストスピーカーにオンラインでお話しを伺ったりと、リアルタイムに海外と繋がるという経験が蓄積され、国境を越えての移動が復活した現在でも、オンラインでの交流や国際プログラムは選択肢の一つとして継続的に実施されています。私のオフィスにおける主な業務の一つは学

生の送り出しのサポートです。学生が海外への関心を高めるきっかけを作り、一歩外へ踏み出す後押しをすること、そして駒場キャンパスで学ぶ留学生とローカル生を繋げ、意義ある交流を促す場を提供することです。しかし、学生からは「どうせ、留学や国際交流は意識高い系がすること」、「英語が話せないから不安」という声をよく耳にします。そのような思い込みを払拭し、学生の留学や国際交流に対する心理的な敷居を下げるための工夫として、教職員が前面に立つのではなく、学生が主体となり、学生同士が学び合える場を提供しています。一例を挙げると、交換留学

の経験者を学生留学アドバイザーとして雇用したり、東大で学ぶ交換留学生と留学や海外に興味のあるローカル生を繋げるイベントを開催したりしています。

大学の制度を利用した海外留学のチャンスは大幅に広がっておりますが、利用する学生はまだ少数派です。例えば全学交換留学の派遣枠は五七〇以上もありますが、現時点で二〇〇枠ほどしか使われていません。勿論、留学は保護者の経済的な負担も大きく、特に円安が進んでいる現状では、誰にでも薦められるものではないのも事実です。しかし、一年生のうちから計画的にアルバイトをして貯金をしたり、奨学金制度を探したり、生活費や渡航費が安い留学先や、参加費補助の手厚い短期プログラムを探したり、オンライン留学プログラムを利用したりと、早くから行動を起こし、適切な情報を得ることによって、留学の可能性も広がります。

費用や語学力、就活や進学先との兼ね合いなど、様々な理由から留学をすることが難しい学生もいます。しかし、多数の留学生が在籍している東大では、気軽な昼休みの交流イベントからアクティブラーニングを取り入れた共修型授業まで、キャンパス内で留学生と共に学べるチャンスが無数にあり、留学に匹敵するような学びを得ることも不可能ではありません。

学生のうちに多様な文化に触れ、様々な背景を持つ人々と対話し、共に考え、共に行動することは、これから社会に出る上で必要不可欠な経験だと思います。しかし、異なる価値観と対峙し、自らの価値観や常識が覆される経験は刺激的で、面白くもあります。同





り辛いところもあると思います。そんな時には、是非、グローバルゼーションオフィスに立ち寄って、気軽に相談頂ければ幸いです。
(<https://twitter.com/UTokyoKomabaGO>)
(国際交流センター・)

グローバルゼーションオフィス、講師)

東京大学運動会応援部の思い出

令和五年卒 杉田南実

こんにちは。令和五年に東京大学を卒業致しました、杉田南実と申します。私は二〇一九年に東京大学文科三類に入学し、二〇二二年の進学選択では教養学科超域文化科学分科表象文化論コースへ進学致しました。この度は東大駒場友の会第四二号会報へのエッセイ執筆という機会をいただき、心より感謝申し上げます。

この場をお借りして、私が大学四年間の生活の軸としていた「運動会応援部」という課外活動の思い出をエッセイに纏めたく存じます。

応援部とは、東京大学運動会に属する総勢八〇人強の部活動団体です。その中には、楽器を演奏する「吹奏楽団」、ダンスやスタuntsと呼ばれる組体操を披露する「チアリーダーズ」、そして学ランを着て発声や拍手で応援を先導する「リーダー」の三つのパートがあります。荘厳たる東京大学駒場キャンパスで、大声で歌い、踊り、楽器や太鼓を鳴らし、学生を全力で応援する集団がいることは、まさにカルチャーショックでした。その不可解さに興味を持ち、気づけば「チアリーダーズ」パートとして応援部に足を踏み入れています。

ました。

運動会応援部の主たる活動は、その文字通り「運動会の部活動・東大生を応援すること」です。私が入部した二〇一九年は新型コロナウイルスの影響もなく、選手や大勢の観客の間近で応援をしていました。明治神宮野球場では打球音に負けな

い声量で応援し、サッカー場ではコート縦横無尽に行き交う選手一人一人にエールを送り、川辺では水の涼しさを掻き消すような熱量で漕艇部を応援します。活動の中で熱気に満ちた会場や試合から生まれる感動の素晴らしさを学びました。

しかし二〇二〇年、新型コロナウイルスの流行により、全ての対面活動が制限されました。春や夏の応援活動やイベントは全て中止、練習はオンラインで行い、秋以降も応援する上で様々な制限が課されました。難しい状況下でも応援部を存続し、できる限り選手に寄り添った応援を展開してくださった先輩方の背中に憧れたことを覚えています。

そして二〇二二年、私は応援部三パート全体の主将に就任しました。応援部七五年の歴史の中で初めて女性が主将に就任したということで、最初は部内外で批判の声が上がるのではないかと心配しておりましたが、皆様快く受け入れてくださりました。後輩たちは皆コロナ禍で入学してきたため、どうしても応援部のコロナ以前のような伝統を引き継ぐこ



とができるのか苦悩することもありましたが、先輩方をはじめとする多くの関係者の皆様のおかげで、コロナ以前に近い形での応援も実現することができました。応援部三パートをまとめ、東大運動部の活躍、勝利を目標に、引退まで駆け抜けることができました。

さらに、同年には「地方出身の女子東大生」としても多くの経験をさせていただいた一年間でした。東京大学OBの先輩の素敵な計らいにより、応援部「主将」として地元長野県松本市の市長に表敬訪問をさせていただきました。また、「地方出身の東京大学の学生」として、母校で講演会を企画していただいたり、新聞やテレビといったメディアに取り上げていただいたりする機会もございました。

これらの活動が「東京大学に進学を希望する女子生徒や地方生徒を励まし、東京大学の多様性促進に貢献した」として評価され、「東京大学運動会応援部初の女性主将としての活躍」というタイトルのもと、二〇二二年度の総長大賞をいただきました。この賞は、応援

時に均衡を崩されることは、不安で、不愉快でもあります。私自身も留学中や海外勤務中に、現地の人々との関わりの中で、波風を立てたくないがために、問題に深く踏み込まず、意見の対立を避けたり、受け流したりしてしまったことによって、失敗した経験が多々あります。学生には、異なる意見や立場を排除したり、無視したりせずに、違いを認識して、一旦受け止めた上で、ぶつかったり、歩み寄ったり、新たな道を模索したり、試行錯誤しながら他者と関わる経験を積んで成長して欲しいと思っています。

国際交流や留学プログラムは、学内の様々な部署が企画していることから、情報を全て集約することが難しく、学生にとっては分か



金曜講座二〇二三年度・

冬学期(Aセメスター)

東京大学教養学部主催「高校生と大学生のための金曜特別講座」は二〇二三年度・冬学期(Aセメスター)も会員の皆様に受講いただけることになりました。(ただし二〇二四年度・夏学期以降も継続して金曜講座を受講可能かどうかは現段階では未定です)

受講希望の方は<https://bit.ly/3UStsXm>または左記QRコードのフォームより必要事項をご記入の上、お申し込みください。受付手続きに日数を要するため、直前にお申し込みいただいても講座の受講に間に合わない可能性もありますので、ご注意ください。



WEBサイト

リニューアルのお知らせ

かねてより準備を進めておりましたWEBサイトのリニューアルが完了いたしました。移行期間中は部機能の停止で大変ご不便をおかけいたしました。

リニューアルに伴い、新サイトにログインするための新しいパスワードを設定させていただきました。新パスワードに関する手続きとその方法について、近日中にメールでご案内を差し上げますので、ご対応くださいますようお願いいたします。ご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

◆友の会主催行事のご案内

＊味覚のアトリエ@駒場

(十一月二日予定)

※現地での開催予定。

申し込み方法等、詳細は後日当会WEBサイトに掲載します。

＊秋の講演会

(十一月十八日予定)

「パリ・オペラ座展」を終わって―芸術の饗宴がもたらすもの

三浦篤氏(大原美術館館長、東京大学名誉教授)

※現地での開催予定。

申し込み方法等、詳細は後日当会WEBサイトに掲載します。



◆駒場博物館

駒場博物館では九月三〇日から

「つながるかたち展03」

を開催いたします。

会期：二〇二三年

九月三〇日(土)～十一月二六日(日)

開館時間：十時～十七時

休館日：毎週火曜日

入館無料

(こ)来場に関する最新情報を事前に駒場博物館ウェブサイトにてご確認ください)

<http://museum.c.u-tokyo.ac.jp/index.html>



◆第七四回 駒場祭

十一月二四日(金)～二六日(日)

詳細は駒場祭WEBサイト

<https://www.komabasai.net/74/pre/>をご覧ください。

東大駒場友の会会報【第41号】2023(令和5)年9月15日発行
東大駒場友の会 会長 木畑洋一

〒153-8902 目黒区駒場3-8-1 東京大学 駒場ファカルティハウス内
電話：03-3467-3536 FAX：03-3465-3334
お問い合わせ等は、メールでのご連絡をお願いします
メール kmptom@gmail.com
web サイト <https://tomonokai.c.u-tokyo.ac.jp/>

デザイン・印刷 株式会社双文社印刷
<https://www.sobun-printing.co.jp>



会報のバックナンバーをインターネット上でご覧いただけます。
東大駒場友の会ホームページのトップ画面に「会報バックナンバー」というボタンがありますので、そこからお入りください。

爽やかな風に包まれてゆったりとくつろぐことのできる

フランス料理

ルヴェ ソン ヴェール 駒場

東大駒場友の会会員カードをお持ちの方は食後のお飲み物(コーヒーまたは紅茶)が1杯おかわり可能です。
ご注文の際にご提示くださいませ。

【営業時間】11:00～14:30、17:00～21:00
Tel：03-5790-5931 / Fax：03-5790-1902
◎駒場ファカルティハウス内

<一般会計>

収 支 計 算 書

2022年4月1日から2023年3月31日まで

(単位:円)

勘 定 科 目		予 算 額	決 算 額	差 異	備 考
Ⅰ 事業活動収支の部					
1. 事業活動収入					
(1) 会費収入	① 通常会員会費収入	1,600,000	1,815,000	△ 215,000	
	② 会友会費収入	6,900,000	6,924,000	△ 24,000	
	③ 終身会員会費収入	300,000	359,000	△ 59,000	
	会費収入計	8,800,000	9,098,000	△ 298,000	注 1
(2) 寄付金収入	① 学生のための寄付金収入	3,200,000	3,629,000	△ 429,000	
	寄付金収入計	3,200,000	3,629,000	△ 429,000	
(3) 事業収入	① 保護者と教養学部長との懇談会	0	0	0	
	② 活動報告会	0	0	0	
	③ 食関連セミナー	250,000	274,500	△ 24,500	
	④ 秋の講演会	50,000	0	50,000	
	⑤ 秋の文化イベント(父母向け)	50,000	0	50,000	
	⑥ カレンダー事業	150,000	153,920	△ 3,920	
	事業収入計	500,000	428,420	71,580	
(4) その他収入	① 受取利息収入	200	141	59	
	② 雑収入	1,800	500	1,300	
	その他収入計	2,000	641	1,359	
事業活動収入 計		12,502,000	13,156,061	△ 654,061	
2. 事業活動支出					
(1) 事業費支出	① 給料手当支出	1,300,000	1,300,000	0	
	② 臨時雇賃金支出	0	0	0	
	③ 福利厚生費支出	400,000	400,000	0	
	④ 会議費支出	200,000	65,480	134,520	
	⑤ 旅費交通費支出	10,000	0	10,000	
	⑥ 通信運搬費支出	800,000	735,830	64,170	
	⑦ 消耗品費支出	250,000	90,097	159,903	
	⑧ 印刷製本費支出	800,000	789,321	10,679	
	⑨ 賃借料支出	50,000	0	50,000	
	⑩ 委託費支出	600,000	594,551	5,449	
	⑪ 諸謝金支出	190,000	188,900	1,100	
	⑫ 寄付支出	3,500,000	3,293,385	206,615	
	⑬ 雑支出	40,000	7,755	32,245	
	事業費支出計	8,140,000	7,465,319	674,681	
(2) 管理費支出	① 給料手当支出	600,000	600,000	0	
	② 臨時雇賃金支出	0	0	0	
	③ 福利厚生費支出	10,000	5,214	4,786	
	④ 会議費支出	80,000	43,600	36,400	
	⑤ 旅費交通費支出	2,000	0	2,000	
	⑥ 通信運搬費支出	350,000	311,077	38,923	
	⑦ 消耗品費支出	150,000	52,929	97,071	
	⑧ 印刷費支出	130,000	124,986	5,014	
	⑨ 光熱水料費支出	160,000	156,075	3,925	
	⑩ 事務室賃借料支出	220,000	215,876	4,124	
	⑪ 会員証作成費支出	400,000	290,263	109,737	
	⑫ 入会勧誘活動費支出	200,000	194,293	5,707	
	⑬ 会費等振込料負担金支出	730,000	727,281	2,719	
	⑭ 委託報酬支出	1,110,000	1,109,778	222	
	⑮ 雑支出	10,000	4,290	5,710	
	管理費支出計	4,152,000	3,835,662	316,338	
事業活動支出 計		12,292,000	11,300,981	991,019	
事業活動収支差額		210,000	1,855,080	△ 1,645,080	
Ⅱ 投資活動収支の部					
1. 投資活動収入					
投資活動収入 計		0	0	0	
2. 投資活動支出					
(1) 固定資産取得支出	① ソフトウェア取得支出	1,000,000	0	1,000,000	注 2
投資活動支出 計		1,000,000	0	1,000,000	
投資活動収支差額		△ 1,000,000	0	△ 1,000,000	
Ⅲ 財務活動収支の部					
1. 財務活動収入					
財務活動収入 計		0	0	0	
2. 財務活動支出					
財務活動支出 計		0	0	0	
財務活動収支差額		0	0	0	
Ⅳ 予備費支出		(140,000)			
		860,000		860,000	注 3
税引前当年度収支差額		△ 1,650,000	1,855,080	△ 3,505,080	
法人税、住民税及び事業税		70,000	70,000	0	
当年度収支差額		△ 1,720,000	1,785,080	△ 3,505,080	
前年度繰越収支差額		10,684,143	10,684,143	0	
次年度繰越収支差額		8,964,143	12,469,223	△ 3,505,080	

注 1: 会費収入に含まれている前年度前受金額は、通常会員会費収入770,000円、会友会費収入2,992,000円です。

注 2: 新WEBサイトの構築が遅れており、支出は2023年度に持ち越し

注 3: 予備費使用額 ◆事業費支出: 諸謝金支出40,000

◆管理費支出: 福利厚生費支出10,000 印刷費支出10,000 光熱水費支出40,000 会議費支出30,000 委託費支出10,000